
研究報告

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究 3
P.21-32 (2015)

臨地実習指導者のキャリア発達支援 ～キャリア発達支援プログラムの実践と評価～

The Career Development Support for Clinical Instructors to Nursing Students - Practice and Evaluation of The Career Development Support Program -

| | | | |
|---------------------------------------|---|---|---------------------------------------|
| 近藤 ふさえ ¹⁾ KONDO Fusae | 堀込 克代 ²⁾ HORIGOME Katsuyo | 濱口 真知子 ²⁾ HAMAGUCHI Machiko | 佐々木 史乃 ¹⁾ SASAKI Shino |
| 桑村 淳子 ¹⁾ KUWAMURA Junko | 石塚 淳子 ¹⁾ ISHIZUKA Junko | 中尾 恵美子 ²⁾ NAKAO Emiko | 三角 百合子 ²⁾ MISUMI Yuriko |

要 旨

目的：臨地実習指導者のキャリア発達支援プログラムの実践過程を振り返り、実習指導体験の意味付けや学びからキャリア発達支援プログラムの成果と課題を明らかにする。

方法：介入研究。平成24・25年度A大学附属病院の現任教育ラダーⅢと連動して「実習指導体験を語る会」、第3回研修会終了後、事後インタビューを行った。

結果：平成24年度現任教育ラダーⅢ対象者は17名であった。そのうち「実習指導体験を語る会」への参加者は5名であった。内省する機会は気づきや学びの機会となることから、平成25年は現任教育ラダーⅢに組み入れ先輩指導者の参加も得て開催した。第3回研修会では計画・実践に対する評価の強化を試みた。

考察：病院内での指導者研修の利点は、1年間をとおして看護教育の基礎的な学習を行いながら、実習指導体験とその内省を継続的に実施できることにある。また、指導者の困難事に対して先輩指導者や教育課、大学教員と共に対話にすることで具体的な指導方法につながると考える。キャリア発達支援プログラムの課題は実習指導案の在り方と組織的な取り組みと自己研鑽を促進することである。

結論：1. 指導案フレームと記載内容の簡便化の工夫が必要、2. 指導者自身の自己研鑽と継続的に組織的な取り組みが必要、3. 「学習－実践－内省－実践－内省」が、臨地実習指導者としてのキャリア発達に効果をもたらすことが示唆された。

索引用語：キャリア発達、キャリア発達支援、臨地実習指導者

Key words：Career Development, Career Development Support, Clinical Instructors

1. はじめに

看護基礎教育における臨地実習は、看護実践能力を培うために不可欠な学習課程である。この学習過

程は、看護の方法を「知る」「わかる」段階から「使う」「実践できる」段階に到達させることである¹⁾。そのため、臨地実習指導者（以下、指導者）には指導能力が求められている。筆者ら大学教員は、本学部が開設した平成22年より臨地実習指導者研修に携わり、看護部教育課と共に指導体制の充実と強化に取り組んできた²⁾。その結果、指導者は自己の学生時代の臨

1) 順天堂大学保健看護学部

2) 順天堂大学医学部附属静岡病院

1) *Juntendo University Faculty of Health Sciences and Nursing*

2) *Juntendo University Shizuoka Hospital*

(Nov. 14, 2014 原稿受付) (Jan. 16, 2015 原稿受領)

地実習体験がマイナスイメージを生じさせていたが、指導者の役割遂行の不安や自分自身への期待感を持っていた。また、学生には臨地実習ならではの体験をしてほしいと願いながら指導に臨んでいた。臨地実習指導の実際においては患者への責務を第一に考え、教員・スタッフとの調整を図りながら役割を遂行し、指導者自身が学生と共に成長することにつながっていた。

しかし、課題として迷った時に相談できるサポート体制、指導能力の向上を図る支援が必要であることも明らかになった。仲野ら³⁾は、指導者には継続して学びたい希望があり、実施した指導の評価、指導の葛藤や困難感の克服を支援し、指導能力の維持発展を図るために継続教育が必要であると述べている。また、指導者への組織的なサポートの必要性も示唆されている⁴⁾⁵⁾。そこで、臨地実習指導能力の向上を図るため継続的なキャリア発達支援プログラムの実践を振り返り、評価と今後の課題を考察した。

II. 目的

臨地実習指導者のキャリア発達支援プログラムの実践過程を振り返り、実習指導体験の意味付けや学びからキャリア発達支援プログラムの成果と課題を明らかにする。

【用語の意味】

1) キャリア発達支援プログラム

臨地実習指導者としてのキャリアを育むために、役割遂行の過程で成長を目指す組織的・系統的な現任教育ラダーⅢのプログラムを意味する。

2) 現任教育ラダーⅢ

臨床経験5年目以上の看護師を対象とした指導者となるための初期教育であり、実習指導の基礎となる知識を学び、役割の遂行を支援する卒後教育プログラムの一つである。

3) 臨地実習指導者の体験

指導者として新たな立場や役割の遂行の過程で、看護学生、病棟看護師長・看護師、看護教員、教育課スタッフ、他の医療従事者との関係性の中で生じた事象とそれに対する感情、思惑、思考を含んだ本人の出来事とする。その体験を内省(リフレクション)することによって意味づけすることができ、臨地実習指導の経験知として獲得されていくことを意味する。

III. 方法

1. 研究デザイン：アクションリサーチを用いた介入研究

アクションリサーチは、課題解決に向け介入を実施してゆく過程の状況を描写し、解釈、説明するものである。それは、課題に焦点をあて、計画・実行・評価が円環的に結びつくものであり、研究者と参加者との共同活動であるとされている⁶⁾。また、遠藤ら⁷⁾は、看護師と教育者のパートナーシップの下で看護師の願いを確定し、対話と内省と行為を繰り返す中での変化を創出し理論の発展を目指す研究プロセスと述べている。さらに、“共同”には、専門的知識の差異に基づいた研究者主導型、実践者と研究者の相互依存的共同型、実践者の自覚と高揚を目指す型があると述べている。

本研究での“共同”は、キャリア発達プログラムの実践であることから、研究者主導型と相互依存的共同型のスタイルを同時に持ち合わせた型といえる。アクションリサーチのプロセスは、①看護部教育課と大学教員、臨床経験5年目以上の看護師が、キャリア発達プログラムをとおして相互依存的な共同関係に入る。②臨地実習あるいは指導者としての“願い”を明確にする。③実践と相互の対話をとおして、実習指導についての考えや指導者としてのあり方や学生・患者・家族との関係性の中での変化を描写する。④臨地実習あるいは指導者としての“願い”を実現していく一連のプロセスをとおして、成果と課題を

見出すことである。臨地実習指導者のキャリア発達プログラムと実践と内省の関連について研究の全体として図1に示す。

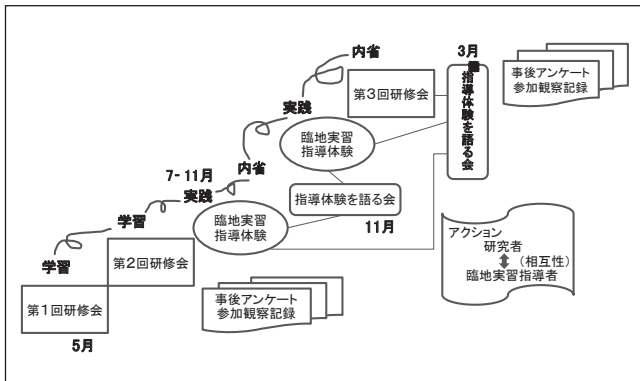


図1 キャリア発達支援プログラムと現任教育リーダーⅢとの関係

2. 研究期間：平成24年6月～平成26年3月。

3. 対象者：平成24・25年度A大学附属病院現任教育リーダーⅢを受講している看護師とする。

4. 分析データとその収集方法

- 1) 現任教育リーダーⅢにあらかじめ課題として組み込まれている第3回研修会前の課題レポート。
- 2) 「臨地実習指導体験を語る会」での記録は、各グループの記録者が筆記した記録および研究者の筆記内容をデータとする。
- 3) 第1回と第3回研修時のリッチピクチャー。“臨地実習に対する願い”に関するリッチピクチャーを描き、その場面説明と意見交換内容を筆記した記録とする。
- 4) 前期のグループインタビューにおけるIC録音を逐語録にした記録をデータとする。なお、後期はICレコーダーの不具合のため、データより除外した。

5. 分析方法

キャリア発達のための支援プログラムを実践してゆく過程における状況を描写し解釈、説明する。得ら

れたデータより、指導者の体験と学びの視点で、実習指導の実際と考え方に関する重要な出来事や変化と思われる状況や発言を描写し、成果と課題を見出す。

IV. 倫理的配慮

研究目的および方法、任意参加、匿名化、途中辞退保証、結果公表について文書および口頭で説明し同意書を得た。グループワークは記録用紙、インタビューは記録用紙とICレコーダー録音の承諾を得て行った。順天堂大学保健看護学部研究等倫理委員会および研究実施施設内看護部の倫理委員会の承認(24-002)を得て実施した。

V. 結果

平成24年6月から平成25年3月を前期、平成25年4月から平成26年3月を後期とする。臨地実習指導者のキャリア発達プログラムの計画、実践、評価に関する結果を述べる。「」は参加対象者の具体的な発言であり、発言者をA指導者～G指導者で示す。「」は研究者の発言を示す。

1. 前期(平成24年6月～平成25年3月)

1) 研修会開催状況

第1回から第3回の開催状況を表1に示す。

2) 臨地実習指導の体験を語る会

11月末日17時より80分間、開催した。参加者は指導者5名(受講者の約30%)、研究者2名であった。研究者がファシリテーターを務め、指導体験の語りを促し、意味づけを行った。

A指導者は初めての基礎看護実習Ⅰの指導を担当した。「患者とのコミュニケーションを学ぶ実習なので、学生もどうしたら良いのか分からないというのが見て取れて、病室に入れなくて病室の入り口で立ち止まっている学生さんがいて、自分でもこのような時にどうかかわっていいかわからなくて、先輩指導者からのアドバイスもあり、学生さんに声をかけて一緒に患者のと

表 1 前期研修会開催内容

| 回 | 実施日 | 目標 | 課題 | 講義内容 | グループワークテーマ | その他 |
|-----|---------|---|---|--|---|--|
| 第1回 | 平成24年5月 | ・臨地実習の教育における授業過程が理解できる。 ・実習要項について理解できる。 ・指導者としての心構えができる | ・事前「学生時代を振り返り今の実習と変化していること」 ・事後「講義で学んだこと」 | ・看護教育の現状 ・経験型実習教育における授業過程モデル ・実習要項について | ・自己の学生時代の振り返り ・現在の看護学生について思うこと ・実習指導者としてのありよう | ・1分間スピーチ「私の実習の思い出」 ・リッチピクチャーのテーマ 「臨地実習指導で印象に残っていること」 |
| 第2回 | 平成24年7月 | ・学生指導の実際を知る。 ・実習指導案の作成方法を理解できる | ・事前「自分の病棟で学ばせたいこと」 ・事後「指導案～学生観・教材観・指導観、日案作成」 | ・臨地実習指導案とは ・学生カンファレンス | ・事例について指導案を作成する 教材観、学生観、指導観 | |
| 第3回 | 平成25年3月 | ・指導案を発表する ・目指す指導者像があらかになる。 | ・指導案 ・カンファレンスに参加したいの学び ・研修をとおしての学び | - | - | ・リッチピクチャーのテーマ 「これからの臨地実習指導の願い」 |

ころに行った」という体験を語った。研究者はその指導がどのような効果をもたらしたかという問いかけを行うと、「カンファレンスでこんなふうに関わればいいのかということ了他学生と共有できて、翌日から頑張っ学生さん自身が患者のところへ行く姿をみて、良かったと思った。」と指導の効果を振り返った。

A 指導者と同じような体験をもつ B・C・D 指導者からも「自分が患者とコミュニケーションをとっている姿を見てもらう」「話しのきっかけができたならフェードアウトする」「他患者との談話に入ることによって偶然、会話の機会が得られた」と自らの体験を語った。研究者から「戸惑う学生の理解やケアのモデリングを示すこと、ケアにおける偶然であったかもしれないけど、何らかの意図があって偶然が偶然でない現象が生じさせているのではないか」と体験の意味づけを行った。

3) グループインタビュー

3月末日17時より90分間、開催した。参加者は指導者6名、研究者1名であった。インタビューはリッチピクチャーに描かれている内容の説明、実習指導をとおしての学びと指導者としての変化、キャリア発達支援プログラムに関する意見を尋ねた。

E 指導者は「学生が実習しやすいように環境・雰囲気づくりをすることを前回描いたが、今度の絵は学生の良いところを見つけて、それをアドバイスしていくことを大切にしたい。学生から『あのような看

護師さんになりたい』と思われる指導者でありたい。学生と関わるのが意外に好きだなと」。

F 指導者は「成人実習だと学生のケアを見守ることを意識しました。患者の全体像をとらえ看護診断することは私も初めてだったので、学生と一緒に考えるという気持ちで学生に接して、一緒に勉強して知識を患者のアセスメントに活かすことで理論と実践との結び付きができた。これからも一緒に学んでいくという気持ちでいたい」。

G 指導者は見守るということについて、「泣いている赤ちゃんを見てお母さんが泣いている場面で学生がオロオロしていたけど、翌日はそれを踏まえて色々考えて、お母さんに接しているのを見ると成長しているな」と。この過程を見守るっていうのが指導者かな。」という体験を語った。見守るために必要な指導者の能力について、「何で?という発問も大切だが、何に困っているのだろうかという学生への発問の仕方を考える」、「その状況における患者の状態をアセスメントする力が必要だよ」と、参加者同士で指導の学びを深め合うことで「体験を語る会は参考になった」というキャリア発達支援プログラムへの評価の発言があった。

以上の介入結果から、臨地実習指導体験を語ることや事後グループインタビューは、指導者としてのキャリア発達のために良い機会となった。しかし、第3回研修会前の課題レポートでは、指導案に基づいた

指導の実際や自己の指導方法の在り方に関する評価の記述と全体発表がなく、キャリア発達支援プログラムの講義、グループワークテーマ、課題レポートテーマ等の内容の工夫が必要となった。そこで、①実習指導計画（指導案）と指導実践の評価の強化、②効果的な内省の機会とするためには研究者と看護部教育課と連携し、継続的な自己研鑽とそれを組織で支援することを新たな課題として後期に取り組むこととした。

2. 後期（平成25年4月～平成26年3月）

後期キャリア発達支援プログラムでは、以下の3点を新たに組み入れた。

- ①学習－実践－内省－実践－内省の過程を経て、学びや課題を明らかにするとともに、目指す指導者像を明確する。
- ②内省としての“実習指導体験を語る”を現任教育ラダーⅢに組み入れ、先輩指導者に参加を募り、組織としてバックアップし継続性を図る。
- ③第3回研修会では指導案や指導方法の評価をグループワークのテーマとする。

1) 研修会開催状況

第1回から第3回の開催状況を表2に示す。

2) 新たな取り組みの成果

(1) 先輩指導者を交えた実習指導の体験を語る会

11月末日17時より80分間、開催した。参加者は31名であった。内訳は当該年度の現任教育ラダーⅢ

受講者18名、先輩の指導者6名、研究者は7名（大学教員4名、教育課3名）であった。1グループの構成は参加者6-7名、研究者1-2名とした。研究者は共に学ぶ意識で参加し、時にファシリテーターとして指導体験の語りを促し、意味づけを行った。司会・記録係りは参加者に依頼した。

各グループともに当該年度受講者の体験の語りから始まり、そのエピソードに対して先輩指導者自身の体験を交えてアドバイスを言ったり、何故なのだろうと意見交換を行ったりした。例えば、「ケア場面での指導の際、教えることで精一杯」な体験に対して、先輩指導者から「学生のペースに合わせる」「学生に寄り添うことが必要」とアドバイスをしていた。

(2) 計画・実践に対する評価の強化を図った第3回研修会

事前課題レポートの発表の後、計画・実施に対する評価を強化するために、①指導案と実習指導の在り方が学生へ及ぼす学習効果、②指導者としての役割モデルとは何かをテーマにグループワークと全体発表を行った。

指導者にとって指導案は「初めて聞く用語、指導者にも指導案という計画があるのだな」と理解し、「病棟で何を学ぶことが出来るかが明確になり、日案が役立つ」という発言があった。しかし、「講義では何となくおぼろげ、病棟でどのような実習を行うことができるか、大学の示す実習目標と関連させ文章化

表2 後期研修会開催内容

| 回 | 実施日 | 目標 | 講義内容 | グループワークテーマ | その他 |
|-----|---------|--|--|--|--|
| 第1回 | 平成25年5月 | 看護基礎教育における臨床実習の位置づけを理解する。 ・臨床実習指導案の概略が理解できる。 ・学生観を明確にできる。 ・指導者としての心構えができる | 事前「学生時代を振り返り今の実習と変化していること」 事後「私の学生観と臨床実習者としての心構え」 ・看護教育の現状と臨床実習の位置づけ ・指導案の必要性 ・現代学生の特徴 | ・自己の学生時代の振り返り変化していること ・1分間スピーチ「私の実習の思いで」 ・現在の看護学生について思うこと | ・自己の学生時代の振り返り変化していること ・リッチピクチャーのテーマ 「臨床実習指導への願い」 |
| 第2回 | 平成25年6月 | 学生指導の実際を知る。 ・実習指導案の作成方法を理解できる | 事前「自分の病棟で学ばせたいこと」 事後「指導案～学生観・教材観・指導観、日案作成」 ・臨床実習指導案の基礎 ・学生カンファレンス | ・事例について指導案を作成する 教材観、学生観、指導観 | |
| 第3回 | 平成26年3月 | 指導案を発表する ・目指す指導者像があらかになる。 | ・指導案 ・カンファレンスに参加している学び ・研修をおおしての学び | - ・指導案に基づく実践と評価 ・指導が学生にどのような効果をもたらしたか ・臨床実習指導者としての役割モデル | ・リッチピクチャーのテーマ 「これからの臨床実習指導の願い」 |

しておくことは大切と分かったが、どう活用してどう評価をすれば良いか分らなかった」「指導案は書いたが活かせなかったため、迷うことや困ることがあった」「指導時に指導案は頭になかった」など、十分に活用できなかった状況について貴重な発言もあった。

指導案の評価については「指導の後の振り返りには、指導案の中でも日案、例えば、「麻痺の患者への全身清拭の場面で何を確認するか、どのような発問をするなど、具体的に計画すると実際の指導に結びつきやすい」という発言があった。役割モデルについては、「指導者と教員の役割の違いがあった」「指導者は将来の看護師像の目標になる」という発言が聞かれた。そして、「これからの臨地実習指導のあり方に対する願い」をリッチピクチャーに描き語ることによって、研修前後の自分の思いや考えの変化に気づき、学びをグループメンバー間で共有した。

VI. 考 察

病院内での臨地実習指導者研修の利点は、1年間をとって看護教育に関する基礎的な学習を行いながら、実習指導体験とその内省を継続的に実施できることにある。また、指導者が今まさに直面している困難事について、先輩指導者や看護部教育課、大学教員と共に対話することで具体的な指導方法につながると考える。平成22年度から現任教育ラダーⅢ臨地実習指導者研修に携わって4年が経過した。特に平成25年度の取り組みとして①実習指導計画（指導案）と指導実践の評価の強化、②効果的な内省の機会とするためには研究者と看護部教育課と連携し、継続的な自己研鑽と組織での支援の強化を図ったので、その2つの視点で考察する。

1. 実習指導計画と評価：指導案作成の成果と課題

指導案に関する講義は120分、グループワーク80分で共通事例を用いた指導案作成演習を行い、その

後、個人学習で「実習病棟における指導案（学生観・教材観・指導観、日案）作成」に取り組んだ。指導案作成のために、教育課看護師長や病棟主任や先輩指導者からアドバイスを受けながら、実習開始前までに完成させ提出していた。したがって、概ね指導案作成をすることは達成できたと考える。しかし、指導者にとっては初めて聞く用語であり、おぼろげな理解に留まっていた。「大学の示す実習目標と関連させ文章化しておくことが大切なのは分かったが、どう活用してどう評価すれば良いか分らなかった。」とあるように、模倣レベルの形式的な作成であったことは否めず、指導場面での活用が十分でなかったことが、結果として最終的な全体発表の際に指導案の実施・評価に関する意見がみられないことにつながったと考える。

指導案は「都道府県保健師助産師看護師実習指導者講習会実施要項（厚生労働省通知）」⁸⁾の授業内容に定められている。指導案を立案する目的は、実習目的・目標と当該実習病棟の特徴を関連させ、学生が病棟で何を体験し学ぶことができるかという意図的な学習支援のためである。さらに、指導案は Benner⁹⁾が述べているように実践に内在する偶発性や不完全性を伴う、現実の実践が持つ時間制や曖昧性についてあらかじめ備えることに寄与する（著者傍点）。つまり、指導者の看護の経験知から当該病棟での臨地実習において、学生が直面するであろう、偶然で必然的に起こり得る問題を想定した指導案を作成することである。

例えば、糖尿病教育入院をする成人期患者を受け持った場合、学生は「何もケアすることがない、何をしたら良いのか分らない」と悩み躓くことが多い。その悩み躓きを想定した指導案を作成することによって、学生に対して「看護ケアとは？慢性病患者の生活、成人の学習、セルフマネジメントとその教育的支援とは？」など意図的に学生へ問いかけることによって、理論と実践を結びつけた理解が可能となる。この

ように指導案は、指導者がその場に遭遇した際、戸惑いなく意図的な実習指導を行う道標となる。

しかし、活用できない理由について仲野ら¹⁰⁾は「理解に時間がかかる」「重複して書くのが大変」「活用の時間がない」と述べている。このことから指導案の有効活用につながる指導案フレームと記載内容の簡便化の工夫が必要である。また、指導案に基づいて実践できたか否か、指導案と実際との乖離への対応と学生への効果など、評価の強化が課題である。さらに、指導案を教員や病棟スタッフと共有することも今後の課題と考える。

2. キャリア発達支援プログラムにおける組織的な取り組みと自己研鑽の促進

本学部の主実習施設の指導者は、所属組織より「助手（臨床看護）」として辞令が交付され、その任務に携わっている。しかし、すべての指導者が公的な機関で臨地実習指導者講習会を受講しているわけではない。公的な機関での臨地実習指導者講習会の時間数は8週間240時間¹¹⁾、A県看護協会主催研修会では40日間240時間¹²⁾であり、受講定員数も限られていることから、一施設で複数の指導者を受講させることは難しい。また、年間を通して臨地実習を受け入れている現状では、指導者の負担軽減のため一病棟3名程度の指導体制で行っている。このことから、病院内における現任教育ラダーⅢは、臨地実習指導者となるためのキャリア発達支援の初期教育ともいえる。

臨地実習の充実が学生の成長につながり、指導者としての成長が病棟の看護実践のレベルアップにもつながる。泊らは¹³⁾、施設にとって指導者は看護師の人材育成の一旦となりうるため、組織での指導者の教育や位置づけを明確にすることが望ましいと述べていることから、看護部教育課と大学教員が協働していくことは有意義である。

指導者は役割遂行に対する不安と期待を持ちながら、学生と共に成長する臨地実習指導者でありたいと願っていた¹⁴⁾。臨地実習指導者としてのキャリア発達支援の課題は、迷った時に相談できるサポート体制と教育実践能力の向上を図ることであった。

平成24年度は11月に「指導体験を語る会」を企画し、参加者間での気づきや新たな学びも多かった。しかし、参加者は17名中5名と少なく、指導者自身に自己研鑽を求めても限界があると考えた。そこで組織的に機会を提供¹⁵⁾することで自己研鑽のきっかけとなるよう、平成25年度は現任教育ラダーⅢに「指導体験を語る会」を組み入れ、先輩指導者にも参加を促した。指導者間で様々な困難事に直面しながら試行錯誤していることに気づき、先輩指導者のうまくいった指導体験やアドバイスを受けられたことは、自らを振り返る良い機会となった。高島らも¹⁶⁾、行為の中で省察は実習指導者や教員たちとの実践的対話を通じて相互的に行われると述べられている。平成22年から平成25年度の実施評価をふまえ、平成26年度現任教育ラダーⅢの企画を行った。その実施要領を**参考資料1**に示す。

指導者としてキャリア発達支援プログラムでは、「学習－実践－内省－実践－内省」の過程を経て、学びや課題を明らかにするとともに、目指す指導者像を明確にすることができると考える。内省としての「指導体験を語る会」は、指導者としてのキャリア発達支援の要ととらえていきたい。仲間同士で対話することについて高島らは¹⁷⁾、相互の経験を尊重できる同僚と指導について対話による省察をすることは解決の糸口になると述べている。Benner¹⁸⁾は、語り手が実際の臨床状況で問題に気づいたり、問題を認識したりすることについてドラマティックに説明するので、語り手の感じていることが明瞭になると述べている。また、成長途上の看護師も同僚に教える手助けをしている、臨床知を他者へ伝達することが看護

実践の中心で、経験知をお互いに共有することは教育と学習になると他者の臨床的成長を促す¹⁹⁾ことも述べている。

臨地実習指導者としてのキャリア発達支援のために継続的な組織的な取り組みを軸に、指導者自身が指導案や指導方法の評価など自己研鑽に励むことや、指導経験年数を問わず指導者間同士で実習指導に関する興味・関心をもちながら、切磋琢磨する職場文化を築いていくことが課題と考える(図2)。

おわりに

保健看護学部の開設以来4年間、大学生の臨地実習を初めて受け入れる主臨地実習施設との協働によって臨地実習指導者育成の初期教育に携わってきた。本研究の結果は一施設のものであるが、病院内における臨地実習指導者のキャリア発達支援プログラムをお考えの看護部教育課の皆様の参考データにさせていただいたら幸甚である。読者の皆様より忌憚のないご意見を頂くことにより、キャリア発達支援プログラムを修正し更にブラッシュアップしていきたいと考える。

VII. 結 論

臨地実習指導者としてのキャリア発達支援プログラムの成果と課題について、

1. 臨地実習指導者にとって指導案は道標となるが、その有効活用につながる指導案フレームと記載内容の簡便化の工夫が必要である。
2. 病院内における臨地実習指導者育成の初期教育では、指導者自身の自己研鑽と継続的に組織的な取り組みが必要である。
3. キャリア発達支援プログラムでは学習－実践－内省－実践－内省をする企画が、臨地実習指導者としてのキャリア発達に効果をもたらすことが示唆された。

謝辞

本研究にご協力くださいました A 大学附属病院の臨地実習指導者の皆様に感謝申し上げます。また、平成 24・25 年度順天堂大学保健看護学部研究の助成を受けて実施できましたことに感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 文部科学省報告書「大学における看護実践能力の育成の充実に向けて」,2002.
- 2) 近藤ふさえ、田中ひとみ、堀込克代、他：臨地実習指導者のキャリア発達支援プログラム構築のための基礎的研究、順天堂大学保健看護学研究発表抄録、2012.
- 3) 仲野良枝、久留島美紀子、米田照美、他：看護教育に関わる臨地実習指導者養成講習効果の持続的発展の一方策－A 県における実習指導者講習会フォローアップ研修の試み－、京都光華女子大学研究紀要、46、91-110、2011-2012.
- 4) グレグ美鈴、池邊敏子、池西悦子、他：臨床看護師のキャリア発達の構造、岐阜県立大学紀要、3(1)、1-7、2003.
- 5) 辻ちえ、小笠原知枝、竹田佐知子、他：中堅看護師の看護実践能力の発達過程におけるプラトー現象とその要因、日本看護研究学会誌、30(5)、31-38、2007.
- 6) H Waterman, D Tillen, R Dickson, et al. : Action research: a systematic review and guidance for assessment, Health Technology Assessment, 5(23), p11(1-157),2001.
- 7) 遠藤恵美子、峰岸秀子、新田なつ子他：日本におけるアクションリサーチとは それを可能にする条件と効果、国際ナースレビュー、24(5)、41-47.
- 8) P. Benner, P.L.Hooper-Kyriakidis, D.Stannard : Clinical Wisdom and Interventions in Critical Ca-

- re AThinkin-In-Action Approach,1999.
- 井上智子監訳：ベナー看護ケアの臨床知行動しつ
つ考えること (1999)、第1版第4刷、医学書院、
31-32、2011.
- 9) 厚生労働省医政局看護課：都道府県保健師助産師
看護師実習指導者講習会実施要項 (厚生労働省通
知)、2014年2月28日公布.
- 10) 前掲書 3) p107.
- 11) 前掲書 10) 別添1.
- 12) 静岡県看護協会：平成26年度臨地実習指導者講
習会, (<http://www.shizuoka-na.jp>, 閲覧日 平成26
年7月).
- 13) 泊裕子、栗田孝子、田中克子：臨地実習指導者の
指導経験による“指導のとらえ方”の変化と必要
な支援の検討、岐阜県立看護大学紀要、10(2)、
51-57、2010.
- 14) 前掲書 2) p8.
- 15) 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践センター
：教育-研究-実践をつなぐ臨地実習施設の看護
学教育指導研修プログラム,
(<http://www.n.chiba-u.jp/center/program>. 閲覧日
平成26年7月).
- 16) 高島尚美、渡辺節子、青木由美恵他：成人学習者
としての経験を生かした臨地実習指導者研修プロ
グラムにおける学びの様相、横浜看護学雑誌、
18(1)、35-43、2008.
- 17) 前掲書 15) p42.
- 18) 前掲書 7) p31.
- 19) 前掲書 7) p679.

※参考資料1「平成26年度現任教育ラダーⅢ実施要項」

Ⅱ. 現任教育ラダーⅢ（臨床実習指導者研修）の目的・目標
目的：臨床実習指導者になるために実践的指導能力を高め、看護学生の役割モデルとなり指導ができる。

- ＜第1回＞ 指導者としてのホップ
- 目標
1. 看護基礎教育における臨床実習の位置づけが理解できる。
 2. 臨床実習指導者として学生観・教材観・指導観の概要が理解できる。
 3. 現代の看護学生の特徴を理解し学生観を明確にできる。
 4. グループワークをとおして実習指導者としての心構えができる。

課題

1. 事前レポート：「学生時代を振り返り今の実習と変化していると感じていること」
2. 事後レポート：「私の学生観と臨床実習指導者としての心構え」

- ＜第2回＞ 指導者としてのステップ
- 目標
1. 臨床実習における経験の教材化について理解できる。
 2. 臨床実習指導案の作成方法が理解できる。

課題

1. 事前課題レポート：「私達が目指す臨床実習をふまえた自分の病棟で学ばせたいこと」
2. 事後課題レポート：「臨床実習指導案を作成する～病棟で遭遇することの多いケア・治療処置場面における指導案」

＜第3回＞ 臨床実習指導のリフレクシオン

目標

1. 臨床実習指導で体験・経験した様々なエピソード語り、看護学生のとらえ方や臨床実習指導の理解を深める。

→
一日の計画指導場面、看護学生とのケア場面での出来事、学生と面接指導している時のやり取り、看護計画指導場面、カンファレンスなどのエピソード。
学生のとらえ方、指導で工夫していること、指導で困難だったことなど。

*先程臨床実習指導者（例 H24・25 年受講生）に参加してもらおう。

- ＜第4回＞ 指導者としてのジャンプ
- 目標
1. 臨床実習指導の実践を評価できる。
 2. カンファレンスに参加しての学びを明らかにする。
 3. 看護学生や新人看護師に対する役割モデルとなり指導できる看護実践指導者としてのありよう（目指す指導像）が明確になる。

課題

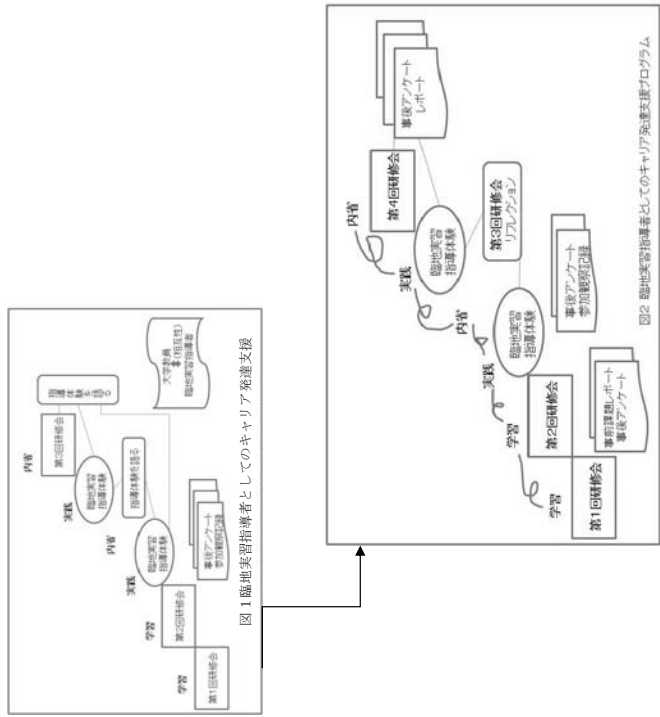
1. 臨床実習指導の実践とその評価
2. カンファレンスに参加しての学び
3. 看護学生や新人看護師の看護実践指導者としてのありよう（目指す指導像）

平成26年4月23日

現任教育ラダーⅢ（臨床実習指導者）

Ⅰ. 臨床実習指導者としてのキャリア発達支援の構造
臨床実習とは、理論と実践の統合を図る重要な授業である。臨床実習指導者は直接的に看護実践を体現し伝えていく教育者である。求められる能力の一つは実習の目的・目標をふまえて、学生が学内で学修した知識・技術・態度を受け持ち患者へのケアに結び付けられるよう意図的に指導できる能力である。しかし、臨床では学生理解の難しさや、刻々と変化する患者の状況判断と看護実践の指導の難しさがあり、臨床実習指導者は「知識を学生に教えるのが術い」と感じたり、「知識・技術が未熟」であったり、「看護実践力と指導力の自信のなさ」から役割遂行に対する不安と期待を抱いている。

本研修は、臨床実習指導者としてのキャリア発達支援の初期教育の段階である。看護部教育課と学部教員との協働で行う。先ず実習指導の基礎を学習し、実習指導の実践と評価までの過程を経て、成長していくことをねらいとしている。



※参考資料1 「平成26年度現任教育ラダーⅢ実施要項」

| 第2回 臨地実習指導案作成 | | |
|---|--|---|
| 事前課題レポート 「私達が目指す臨地実習をふまえた自分の病棟で学ばせたいこと」 | | |
| 導入 | 学習内容 | 方略 |
| <p>1-1 事前課題レポートの発表</p> <p>1-2 学生カンファレンスについて</p> <p>1-3 臨地実習における教材化について理解できる。</p> <p>2. 臨地実習指導案の作成方法が理解できる。</p> <p>2-1 指導案とは指導案を構成する学生観・教材観・指導観とは</p> <p>2-2 実習評価</p> <p>2-3 事例を基に指導案(教材観・指導観)を作成する。</p> | <p>意義</p> <p>近藤</p> <p>意義</p> <p>近藤</p> <p>GW</p> <p>発表</p> | <p>意図</p> <ul style="list-style-type: none"> 教材観を考へる際に、病棟で何を学ぶことができるかを考へる。 カンファレンスの意義を理解する。 「教材化」とは何かを理解する。 指導案を作成するための基礎を理解する。 実習評価のポイントを資料提示する予定。 作成を試みることによって理解を深める。 自分の病棟で何が学べるかを考へながら、指導案を作成するための思考を理解する。 |
| 第3回 臨地実習指導のリフレクション | | |
| 導入 | 学習内容 | 方略 |
| <p>1. 臨地実習指導で体験・経験した様々なエピソード語りあひあいの取り組み現状に関するリフレクションを図り、臨地実習指導者の自己研鑽の機会とする。</p> | <p>参加者</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成26年受講生 平成24-25年度受講生(任意) 「臨床助手」の任命者(任意) 看護部教育課 保健看護学部教員 <p>方法</p> <p>参加者人数によってグルーブ分け、体験を語り合うその意味について意見交換を行う。</p> <p>例; 一日の計画指導場面 ケア場面での出来事 ケア計画指導している場面 など</p> | <p>GW</p> |
| 意図 | | |
| <p>臨地実習指導体験を振り返り、困難だったこと、学生の反応などのエピソードをフリートークする。</p> <p>先輩指導者の体験・エピソードを共有することで臨地実習指導の「おもしろみ」を実感する。</p> | | |

| Ⅲ. 学習目標・内容・方略 | | |
|--|---|--|
| 第1回研修会 | | |
| 事前課題レポート: 「学生時代を振り返り今の実習と変化を感じていること」 | | |
| 導入 | 学習内容 | 方略 |
| <p>オリエンテーション自己紹介</p> <p>1分スピーチ「私の実習の思い出」</p> <p>アイスブレイキング</p> <p>1-1 看護教育の現状と臨地実習の位置づけ(臨地実習ならではの学び)</p> <p>2-1 臨地実習要項・指導案の必要性について</p> <p>2-2 三観へ学生観・教材観・指導観の概要</p> <p>3-1 現代の学生の特徴</p> <p>3-2 現在の看護学生について思うこと～学生観</p> <p>4-1 私達が目指す臨地実習</p> <p>4-2 学生観と目指す臨地実習をふまえ、どのような臨地実習指導者でありたいか(願ひ)。</p> <p>↓</p> <p>リッチピクチャーに描く</p> <p>*事後レポート 「私の学生観と臨地実習指導者としての心構え」</p> | <p>説明</p> <p>教育課</p> <p>意義</p> <p>(近藤)</p> <p>GW</p> <p>個人ワーク</p> | <p>意図</p> <ul style="list-style-type: none"> 参加者が研修での学習目標を理解する。 参加者が知り合い、こころを解きほぐす。 看護教育の現状を理解し、臨地実習ならではの学びを理解してもらう。 臨地での様々な現象がある中で、授業としての臨地実習を意図的に構想していく必要性を理解してもらう。 臨地実習指導の道標となる指導案とその根幹をなす三観の概要を理解してもらう。 学生観を深めるために一般的に云われている若者気質を知る。 看護学生の理解を深めるために、自分なりに学生をどのようにとらえるかを表現する。 臨地実習はひとつの「授業」であり、看護実践教育者としての指導者のありようを考え自覚を促す。 目標3,4に関連する。 講義やGWをおし、臨地実習における看護学生の理解と指導者としての心構えの芽生えを期待する。 |
| 意図 | | |
| <p>臨地実習指導者として、学生観・教材観・指導観の概要が理解できる。</p> <p>現代の看護学生の特徴を理解し学生観を明確にできる。</p> <p>グループワークをとおして実習指導者としての心構えができる。</p> | | |

＊参考資料1 「平成26年度現任教育ラダーⅢ実施要項」

| 学習内容 | 方略 | 流れ |
|---|----|--|
| <p>1. 課題 (A4枚数制限なし)</p> <p>1) 臨地実習指導の実践とその評価 2) 学生との関わりで印象に残った場面やカンファレンスでの関わりのレポート 3) 全体をとおしての自己評価・感想</p> <p>2. 全体発表 ・8分/人で課題1) -3) を発表の後、質疑応答。</p> <p>3. グループワーク：課題 1. 指導案は、指導者および学生にどのような効果をもたらすか。 1) 指導案を作成して気づいたこと。 2) 指導案は学習にどのような効果をもたらすか。</p> <p>2. 臨地実習指導のエピソードを振り返り、実習指導の在り方がどのような学習効果をもたらすか。</p> <p>3. 「看護実践指導者としての役割モデル」とはなにか。また、役割モデルとなるために求められること。</p> <p>4. リッチピクチャー 「どのような臨地実習でどのような指導者でありたいか」という“願い・目標”を描いてみましょう。</p> | 発表 | <p>事前</p> <p>課題提示 (済)</p> <p>課題レポート提出</p> <p>当日</p> <p>全体発表 → レポートを発表 → 質疑応答 GW (50分) → 4・5名/G → 課題についての意見交換 → 議事録提出</p> <p>目指す指導者像 → リッチピクチャー (描写; 20分) → グループ内発表 (15分)</p> <p>全体発表 (10分/G) → 各グループ代表が発表 総括 (20分)</p> |

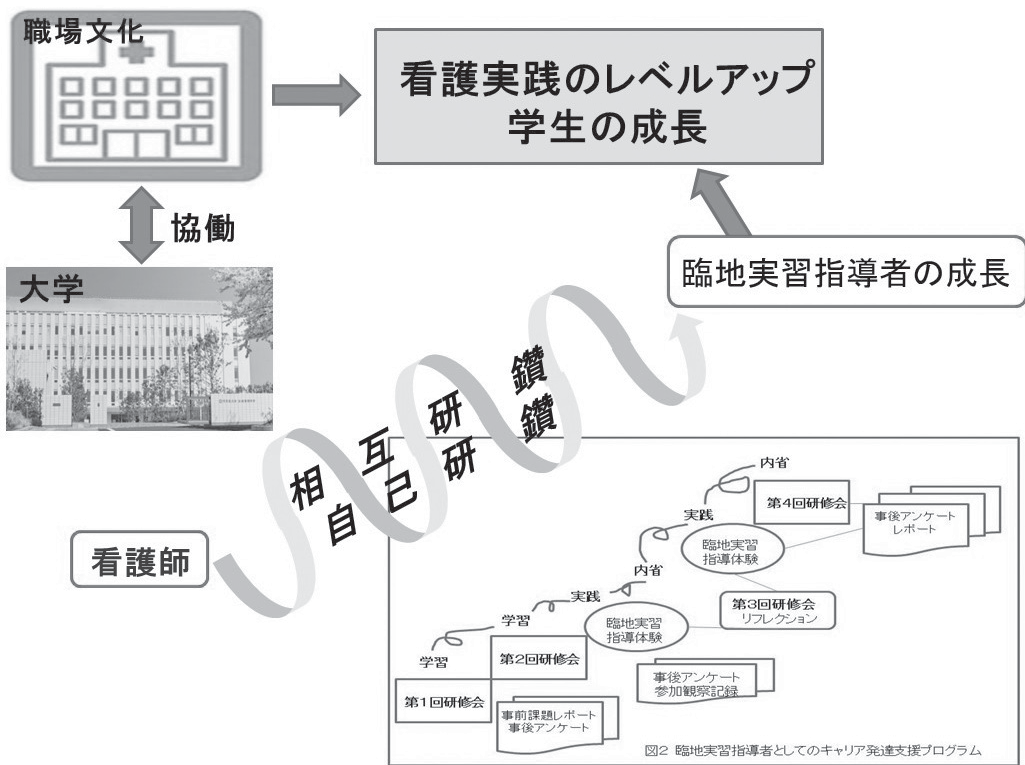


図2 臨地実習指導者の初期教育における自己研鑽と組織的な取り組み